

早いもので当画廊もこの3月でオープンしてからまる2年を数える。今回はマックス・エルンスト、MAX ERNST(1891~1976)の版画30点余の展示である。一昨年9月に“エルンスト・タンギー版画2人展”をやり、続いて同年11月に“博物誌”を催しているので、今回はエルンスト展としては第3回目の展示である。展示作品は第2回目以降の当画廊のコレクションが主体をなしている。

このマックス・エルンストを小生が最初に意識したのはさて何時頃であったろうか？そう思って記憶の糸をたぐっていくうちに、戦後間もなく藁半紙の薄っぺらい美術雑誌で原色版のエルンストの絵を見たのを思い出した。人間とも動物ともつかぬ怪異なものだけのごときものがたむろしていた絵だった…………とするとあの絵は“雨後のヨーロッパ”ではなかったか？…………あの雑誌はたしか“みずゑ”でも“アトリエ”でもなかった…………何という名前の雑誌であったか？…………さて、それにしても見つかるかな…………などと思いながら書棚をかきわけて搜した次第である。

幸いにもこの雑誌をみつけることができた。「創美」という。昭和23年3月1日、創美書院発行、定価50円、48頁、B5版の大きさである。表紙はミロの“鳥に投げられた石”で、号数は第4号、“前衛美術検討号”のタイトルがあり、目次をみると土方定一(現実と超現実)、滝口修造(具象と抽象)、長谷川三郎(新芸術)等の名がみえる。問題のエルンストの絵は原色版の第一頁にあった。“聖アンソニーの苦悩”であった。“雨後のヨーロッパ”ではなかった。

昭和23年3月というと、当時小生は旧制高校の3年になろうとしているところである。恐らくは金沢の香林坊の本屋で買ったものであろうか？あるいはその数ヵ月後四高前の古本屋で買ったものであろうか？あの頃はものない時代で、この粗末な原色版の絵などまるで宝物のように思えたものであった。久し振りに黄色に変色したこの雑誌を手にとり当時の思い出に耽った。それにしても、幾度か転居したが、この雑誌はよくお前の手元に残ったものだ…………やっぱりすてられなかつたということか、ナルホドネ…………そんな声もきこえてきて苦笑を禁じ得なかつた。爾来、M・エルンストは小生のもっとも気になる作家となり、今日に至っている。

さて、シュルレアリスムの画家のうちもっとも代表的典型的な画家は誰か、と問われるならば、小生は躊躇することなくマックス・エルンストと答える。何故なら、その妥協のないハードな精神性の高さ、イメージのスケールの大きさ、さらにその透視能力の強さにおいて比類ないが故に。エルンストの芸術については多くの批評家が語っているが、ここではわが国のもっとも優れたシュルレ

アリストである故滝口修造先生の次の2冊を挙げておきたい。簡潔平明にエルンストについて解説されている。

1. エルンスト——「幻想画家論」(初版1959、新潮社、改訂版1972、せりか書房)に集録
2. 「エルンスト」——現代美術No.5、1960、みすず書房

次にエルンストの版画について若干つけ加えておきたい。W.Spies, H.R. Leppien両氏の労作であるエルンストの版画カタログ・レゾネによると、エルンストはエスタンプの版画を含め 600点ばかり作成している。このレゾネから作成した年代別手法別一覧表を巻末に添付しているのでご参照いただきたい。この一覧表をみて言えることは、版画の作成は第2次大戦以後が主体であること、'60年代までは銅版が多く、逆に'70年代とくに'70~'72年は石版が多いこと、それはポートフォリオが多いためであるが、それにしても際立って多産であること等である。

最後に、このカタログの最初に滝口修造先生の詩“Pour ERNST, Pour TANGUY”を載せ、カタログのカバーもこの詩を使ってデザインしていることについて記しておきたい。この詩は“エルンスト、タンギー版画2人展”に際し、先生が君の最初の企画展のお祝いに、と手紙をそえて贈って下さったものである。詩はペン書きで、上下のラインは金と銀の色鉛筆で画かれている。この詩をいただいたときの状況は今もって鮮かである。先生にカタログをお送りして数日後、先生から速達が届いた。何だろうと思って開いてみるとこの詩であった。余りの思い掛けなさに、全く有頂天の態であった。

不可思議は
文字通りXYZの
斜交いの恋仲

滝口修造先生は昨年7月1日亡くなられた。先生と最後にお逢いしたのは昨年の3月27日、先生からの最後の手紙は4月5日に受け取っている。亡くなれるまでにお逢いすることができなかつたのは残念でならない。なんとも心残りのする気持が今なお続いている——はすかいの恋仲、か。——思わずこの詩の一節をつぶやいているぼくをみる。先生とのなつかしい日々を想い、いま、ぼくは大きな吐息を吐く。先生、聴こえますか？

1980年3月3日

佐谷和彦